

このあと、坂を越え、佑介の実家にこっそり行く必要も、もはやなくなつた。目的を失つた凜子は放心状態となり、緒方家の表札をぼんやりと見つめていた。

そして、「わたしの選択はまちがっていなかったわ」と凜子は心の中で噛みしめるようにゆっくりと唱えた。

たとえ佑介と一緒になつていても、わたしは彼の妻のように、こどもを産むことはできなかつただろうから。

「それに……、それに、こんな田舎でなんか暮らしたくないわ」

強がりだつた。

それを誰よりも凜子がわかつていた。

叫んだ瞬間、凜子の目から涙が溢れだした。

もう帰ろう。

貫太のもとに帰ろう。

貫太は「ずいぶん早かつたね」と少し驚きながらも、笑みを浮かべながら「おかえり」と言つて自分を迎えてくれるはずだ。

凜子を信じ切っている彼は、きつとこう続けるだろう。「どうだった？友だちは元気だった？」と。無性に貫太に会いたくなつた。この土地にはもう、自分の居場所はない。

道の先は行き止まりで、凜子は流れ落ちる涙も拭かずに、車をバックさせて方向転換をした。もう一度、佑介の住む白い家を一瞥したとき、明るい出窓から手を振る海斗が見えた。凜子は、これ以上できないほどに頬を緩めて、彼に手を振り返した。

こどもには何の罪もない。

凜子は前進した。まだちいさな手を振る海斗が見える。そして、そのとなりにすっと立つ男の姿が見えたとき、凜子はさっと目を反らし、アクセルを踏み込んで、その場を立ち去った。

流れる車窓からの景色がにじんだ。

凜子はまっすぐに前を見据えて、ハンドルを握りつづけた。ついさきほどまで晴れ上がっていた空には雲がかかり、徐々に暗くなり始めていた。

しばらく車を走らせ、周りの景色が変わってし

まうと、数十分前に自分の前で起こったことが、夢のなかの出来事であるかのように感じられた。

わたしは夢を見ていたのだと、できることなら凜子も信じたかった。けれど、ドリンクホルダーに入りたいちごオーレがそれを許さなかった。

「ねえ、ぼくが押してあげようか」

「女の子だからピンクにしたの？」

幼い声はどこまでも追いかけてきた。

時計を見るとまだ一時にもなっておらず、凜子は貫太の手前、早々と彼のもとへ帰るわけにはいかなかった。

最後まで嘘をつきとおす。それが、嘘をつこうとした女のせめてもの礼儀ではないか。

凜子は寄り道をしてどこかで時間をつぶそうと考えた。適当に角を曲がり、しばらく細い道を行くと、田園風景の中に一軒の店が見えた。喫茶店に見えるその店は、近づいてみると雑貨屋だった。

店に入る前、凜子は鏡に自分の顔を映し、涙で崩れた化粧を直した。

「こんにちは」

ドアを開けるとカランと音がして、顎に髭をたくわえた男性がほほ笑みかけた。

店内は思いのほか狭く、棚の上にはマグカップや皿、便せん、バスマットなどが窮屈そうに並んでいた。店の真ん中にはアンティーク調のテーブルが置いてあり、簡単な飲食ができるようになってる。

凜子は、アイステイラーを注文し、腰をおろした。それを口にする、いちごオーレで甘くなった口の中がすつきりとし、のどがやつと潤った。

しんとした店の中で凜子は、貫太に会う前に気持ちをすっかりと切り替えておかなくてはいけない、とそれだけを考えていた。

椅子にすわったまま、商品をひとつひとつ眺めていたとき、凜子はちいさな白い鉢に入った植物を見つけた。

植物らしきものはほかにはなく、たったひとつだけ棚に飾られていたので、余計に目立った。その植物には、ウォータークローバーと書かれた札が掛かっていた。じっくり見るとそれは、すべての葉が四つ葉になったクローバーだった。

「かわいい」と思わず凜子は声を上げ、迷わずそれを買った。貫太に見せたらきつと驚くだろう。クローバーを助手席に乗せると、凜子の心は急に軽やかになった。

四つ葉のクローバーといえは、しあわせの象徴。その鮮やかな緑と黄緑の葉がすべて四つ葉であることを思うと、まるで自分がもはやしあわせになったような気さえしてきた。

窓から風が吹き込み、葉を揺らす。

大小様々なクローバーたちは、白い鉢の中で精いっぱい葉を広げ、光を受けて、きらきらと輝いていた。

「ただいま」

凜子はホテルのロビーで貫太を見つけ、弾んだ声をかけた。

「おう、おかえり」

凜子は後ろ手に、さつき買ったクローバーのちいさな鉢を持っていた。

「背中何か隠してる？」

「じゃん」と言っつて、凜子はもったいぶる間も惜

しむように、即座にクローバーを貫太に見せる。

凜子は自分の顔に、今日一番のとびっきりの笑顔が浮かんでいると確信する。

「すごい。ぜんぶが四つ葉だ」と貫太も声をあげる。

そのあと貫太は、

「ところで今日は楽しかった？」

と尋ねた。

「ええ」と凜子は、貫太の目を見ずに、クローバーを見ながら答える。

凜子は貫太に、喫茶店かと思っ入った店が実は雑貨屋であったこと、そこにひとつだけ観葉植物が置いてあり、それがこのすべての葉が四つ葉になったクローバーであったことを、興奮しながら話した。

凜子は出発前に少し考えていた「おんな友達に会った作り話」をするのはやめた。

貫太も友だちに会ったことについては、何も触れてこなかった。

「秘密って言っていたけど、貫ちゃんは何にを  
していたの？」

「いやあ、偶然だな」

貫太は照れくさそうに、頭をかいた。

「実はぼくも、ホテルの庭で四つ葉のクローバーを探していたんだ」

「見つかった？」

「それがね」と残念そうに言っつて、貫太は凜子に自分の両手の爪を見せた。

彼の爪の間には泥が溜まっており、彼の奮闘ぶりが想像できた。

貫太は、いくら探しても四つ葉が見つからなかったことを、面白おかしく凜子に話して聞かせた。

「四つ葉のクローバーを見つけて、君にプレゼントするつもりだったけど……」

「気持ちだけ、いただいておくわ」

凜子は貫太の爪にもう一度目をやった。

「でもいいや。ぼくの代わりに、凜ちゃんがクローバーを買ってきてくれたから。しかも全部の葉っぱが四つ葉だから、心強いな」

貫太の甘くやわらかな声を聞いたとたん、なぜか凜子の胸に、いいよのない怒りと悲しみが込みあげた。(以上7月25日放送分)